われら専修人

FILE NO. 87

生田眞勝

東京消防庁
消防技術安全所長

いくた まさかつ●1976年（昭和51）年、法学部法律学科卒業。1952年生まれ。栃木県出身。民間会社に勤務後、1977年に東京消防庁入庁。2003年、成城消防署長、06年、品川消防署長、09年、第九消防方面本部長などを経て、11年４月より現職。

未曽有の大震災に原発事故。かつてない危険を伴うミッションでした。

大地震に加え、千年に一度とも言われる津波、そして原発事故。極めて危険な状況下、現地では多くの校友が活動した。原子炉冷却のため、指揮支援隊長として放水作業の指揮にあたった、東京消防庁の生田眞勝氏もその一人。初めて体験する過酷さ、隊長として部下やご家族たちへの責任の重さなどについて、うかがった。

世界中の大災害の出動から、地域の日常の防災まで。

東京消防庁は、東京都民および東京都の安全を守ることを主たる目的としています。職員は約18,000人、ポンプ車やヘリコプターなどの装備は、世界の消防の中でも１番であり、実力も１番だと私は思っています。日本だけではなく世界中の災害現場に何十回も出動しており、最近ではニュージーランドのクライストチャーチ地震、中国の四川大地震にも出動しました。

消防というと「消火」のイメージをお持ちかもしれませんが、いまでは災害予防を含めて全般的な分野にまで及んでいます。まず、予防に始まり、もし、起きた場合には救助・救急・消火を行い、被害の軽減を目指します。このようにトータルに取り組んでいる消防組織は、世界的にもあまりありません。

また、防災意識を高めるには、災害時以外でも地域の住民の方々との、おつきあいも大切です。私はさまざまな地域に赴任してきましたが、町会長さんをはじめ地域のいろいろな方々と、お知り合いになりました。人が好きになると、その街も好きになります。

9.11

「2001年８月20日に会議出席のためアメリカに出張した際、ガンチ・ニューヨーク消防局長にお会いして、消防艇に乗せてもらった際に撮影した写真です。その20日ほど後にテロが起こり、最前線で活動したガンチさんはじめ343名の消防隊員が殉職しました。私の消防人生で、非常に強く記憶に残っている出来事です」

危険な状況下、部下や彼らの家族への重い責任。

「東日本大震災」の影響で、福島県の原発では内部の温度が上昇しました。冷却のために放水してほしいとの依頼があり、私は第３陣の隊長として3月22日から25日まで現地入りしました。Ｊヴィレッジ（原発事故の対応基地）のモニター画面で原発の１号機から４号機を監視し、指揮をとりました。隊員たちはタイベック（防護服）に加えて手袋、防護マスクなどを着用し、さらにガムテープで隙間をしっかり塞ぐなど完全防護です。装備をすると、トイレにも行けません。また、汗をかくと服内部の湿度が高くなり、逆に汗が出にくくなって熱中症の危険性があります。作業できる時間が限られるなど、多くの困難と危険がありました。

23日午後、隊員の進入直後、３号機から黒煙が上がりました。直ちに「緊急脱出！」と指示しました。ただ、タイベックの素材は極く薄く、瓦礫などにつまずいて転んだりすると、破れてそこから放射能が侵入して大変なことになります。今回の原発事故は度重なる余震、水素爆発の危険性、それと匂いもしない、目に見えない、しかも高濃度の放射能との闘い……。初めての体験であり、予測がつかないことばかりでしたので、本当に怖かったですね。隊長として今回ほど部下の安全に対する責任、彼らを送り出してくれたご家族に対する責任を、強く感じたことはありません。責任という意味では、現地の自衛隊、警察、東電や協力会社の皆さんも、大変ご苦労されたと思います。

放射能の高濃度汚染下での活動は、世界の消防でも極めて例が少ないと思います。さまざまな検証の結果を、国内外に情報発信していく。それもまた、われわれ東京消防庁の使命だと思っています。（談）

東京消防庁 被災地での活躍

3月13日、宮城県気仙沼市にて（写真提供／東京消防庁）